

曙光

牧師 山本 護

八ヶ岳山麓では乾燥した風の日が通常ですが、この冬はやけに雨や雪が多かった。三月になっても降りましたが、枝先の雪はもう春のものでした。「朝来れば梢から雪溶けはじむ」。子規の教え通り見たままを詠みましたが、あえて言葉にしてみると、この自然に啓示めいた何かを感じます。曙光(しょうこう)が射し枝先から春が開かれていくイメージ。暗闇から薄暮、そして曙。春への胎動が、中心の樹幹ではなく周縁の梢から始まります。



F.ニーチェ中期の著作である『曙光』。この中に幾度か現われる「逸れた人々」はある種のキーワードかもしれません。逸れた人々とは、「常識や社会の秩序から距離を取っていく人、中心から外れて周縁に向かう人たち」のこと。そしてその周縁において「人生と社会との無数の新しい実験がなされなければならない」とニーチェは語ります。そう思い巡らしていると、「朝来れば梢から雪溶けはじむ」という凡庸な句もいわばアフォリズム(物事の簡潔な表現)として、何かにカチンと当たるような気がします。

「あなたの民は進んであなたを迎える。聖なる方の輝きを帯びてあなたの力が現れ、曙の胎から若さの露があなたに降るとき(詩編 110:3)。「曙の胎からの若さの露」は周縁に降ります。つまり「主はあなたの力ある杖をシオンから伸ばされる。敵のただ中で支配せよ(110:2)。「杖」すなわち羊飼いの力の源はシオン(エルサレム)の主であっても、それが実際に現われるのは「敵のただ中」、無明の周縁においてです。

詩人が「敵のただ中」と語り、ニーチェが「逸れた人々」と呼んだその場は、どこなのでしょう。「若さの露」が降る所は、「新しい実験」がなされる所は、いったいどこでしょうか。曙光を受けて私たちは、自らが部分であるキリストの身体を(エフェソ 4:16)、キリストが建てた八ヶ岳教会の位置を改めて確かめる。

曙光の輝きが増し復活祭がやって来ます。復活したイエスは女たちに告げました。「恐れることはない。行って、わたしの兄弟たちにガリラヤへ行くように言いなさい。そこでわたしに会うことになる(マタイ 28:10)」。それとは逆に、弟子たちにはこう命じました。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい(信徒 1:4)。

辺境(周縁)のガリラヤか、中心のエルサレムか。「朝来れば梢から雪溶けはじむ」。であれば私たちはガリラヤをめざします。そこでキリストに会い、「若さの露」を浴び、「新しい実験」をいろいろ試みることになるでしょう。Ω